

普及センター活動紹介【課題に取り組む】

「その先へ・・・」酪農場の未来をつなげ、
新しい生産スタイルを確立させようとしています

課題の背景

重点活動の三本柱〔①良質粗飼料生産の推進、②繁殖成績の改善、③労働環境の改善〕のひとつ繁殖成績の改善では分娩間隔は長いままで、出荷乳量の増加も頭打ちとなっていました。

活動内容

飼料高騰のおり、繁殖管理と飼養管理の基本となる「腹いっぱい(給与する)・もう一口食わせ乾物摂取量を高める」のレベル向上を考え、飼槽ネックレール改修を農業者、飼料会社職員も加わり総出で行いました(写真3)。

改修後の飼槽構造の変化は、牛の立ち位置を起点にネックレール高さ122cm→135cm(+13cm)、突き出し22cm→29.5cm(+7.5cm)となり(図1)、3週間後には牛体ネックの被毛すり切れは減り、出荷乳量も増加の変化が見られました。

次の展開では、給餌タイミングと搾乳牛の「休息時間の確保」を考慮した管理で現場のアップデート(←最新のものに)を図ります。

本所地域第一係
根室市和田地域の取組



写真3 マンパワーで低コスト飼槽ネックレール改修

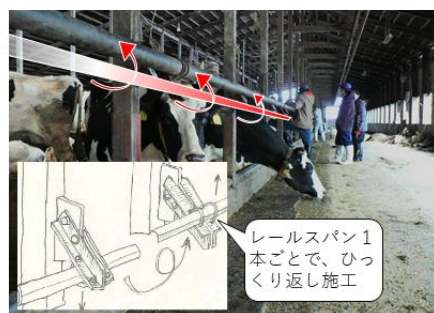


図1 飼槽ネックレール改修後のレール位置変化

草地管理部会と取り組むTMRセンターの肥培管理支援

課題の背景

TMRセンター(株)開陽D.A.Iでは、スラリー体系の構成員が増えており、スラリーを活用した効率的な草地の肥培管理が課題となっています。

活動内容

草地管理部会が主体となり、スラリーを活用した効率的な施肥を実践しました(表1)。生育を確認するため草地のモニタリングや施肥試験をともに実施しました。

また、草地の植生を全筆調査し(写真4)、経過年数毎の収量等の傾向を考慮した技術対策を検討しています。

新たに飼料用とうもろこしの品種比較試験ほを設置し、地域にあう有望な品種選定を検討しています(写真5)。

北根室支所地域係
中標津町開陽地域の取組



写真4 植生調査の様子
(草地管理部会と連携)



写真5 来年の品種を検討中の様子

表1 令和5年に実施した施肥体系(10a当たり)

施用肥料	時期	～R 4	R 5	R 5 修正 ^{※3}
スラリー	早春	－	2 t ^{※1}	2 t
	1 番後	－	2 t ^{※2}	3 t
	2 番後	2～10 t	4 t	2 t
化学肥料	早春	35kg	25kg	25kg
	1 番後	15kg	－	10kg

※1 5月15日(草丈20cm以内)までに散布

※2 収穫直後に散布

※3 赤字箇所はモニタリング結果を受けて1番後から微調整実施

根室地域における飼料用とうもろこしの今後の可能性を検討

本所広域担い手
ねむろTMRネットワークの取組

課題の背景

ねむろTMRネットワークでは、TMRセンターが蓄積した知見を互いに情報共有し、組織運営の一層の効率化とこれを利用する酪農経営の向上を目指す事を目的に情報交換会を開催しています。

活動内容

令和5年8月3日、地方独立行政法人北海道立総合研究機構酪農試験場（中標津町）を会場に根室TMRネットワーク情報交換会が開催されました。

酪農試験場の飼料用とうもろこし栽培実証試験ほで、試験場研究員の説明をうけながら視察を行いました。その後、酪農試験場の講堂に移動し、各TMRセンターの飼料用とうもろこし栽培状況を報告し情報交換会をおこないました。普及センターの地域係長より各地域の栽培状況、変遷等について報告をまじえ、飼料用とうもろこしの栽培限界地域である根室管内で、飼料用とうもろこしを安定生産するための栽培技術や経済性の検討などの意見交換がおこなわれました。

根室地域での飼料用とうもろこしの栽培状況を情報交換し、今後の可能性を検討する活気ある情報交換会となりました。



写真6 栽培実証試験ほの視察の様子

表2 飼料用とうもろこし栽培状況
会員対象のアンケートより
栽培実施6 TMRセンターの集計

栽培方法	播種コーンのRMのクラス	栽培面積
マルチ	90～100日クラス	460 ha

調査研究活動から

飼料用麦類を活用した草地更新技術

麦類同伴栽培は、牧草より初期生育が早い麦類の特性を活かし、春は種の一年生広葉雑草の抑制、更新当年の収量確保、収穫後の牧草の再生向上をねらう技術です。根室管内では一部のTMRセンターと酪農家が導入していますが、事例は多くありません。

令和4年度に酪農試験場に麦類をは種（表3）、2カ年の収量性と本技術の留意点を確認しました。

表3 試験草種およびは種量

草種	品種	は種量 (kg/10a)	
		大麦区	エン麦区
大麦	CDCコアリション (中生)	5.0	—
エン麦	スワン (極早生)	—	5.0
チモシー	マオイ (早生)	2.0	2.0
シロクロバ	アバラストィング (中葉型)	0.3	0.3
計		7.3	7.3

麦類の出芽・定着が不良となった結果、は種当年の収量性が低くなりました（図2）。麦類定着の確実性を高めなければ、初めての収穫において“収量確保”という目的達成が難しくなります。出芽と初期生育を向上させる条件を整えることが必要です。

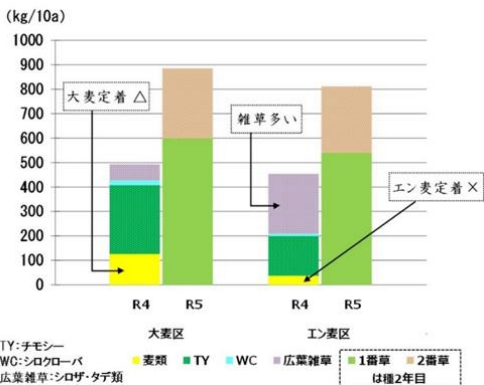


図2 は種当年（R4）と2年目（R5）の乾物収量

麦類の安定した出芽・定着に向けて

- 春は種では「は種前雑草茎葉散布」が難しい！**
 - 前年の耕起前、グリホサート系除草剤を用い、地下茎型イネ科雑草を防除しておきましょう。
- は種作業の精度向上が重要！**
 - 本試験では、覆土処理（レーキ攪拌）が甘かったようです。ロータリーハローの“浅がけ”（深さ：3～5cm）をイメージした方法をとれば、期待する結果に近づく可能性があります。